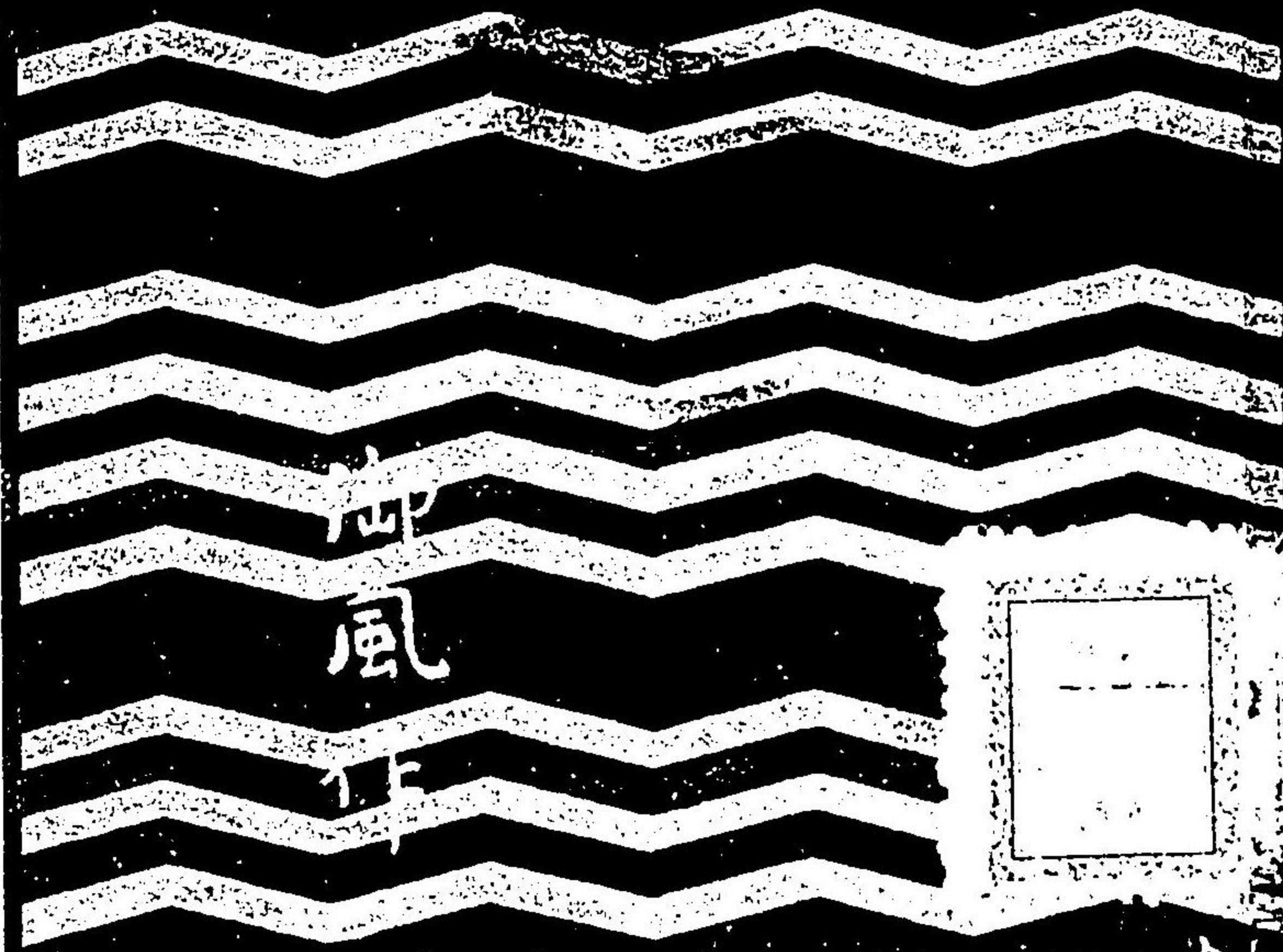


4655

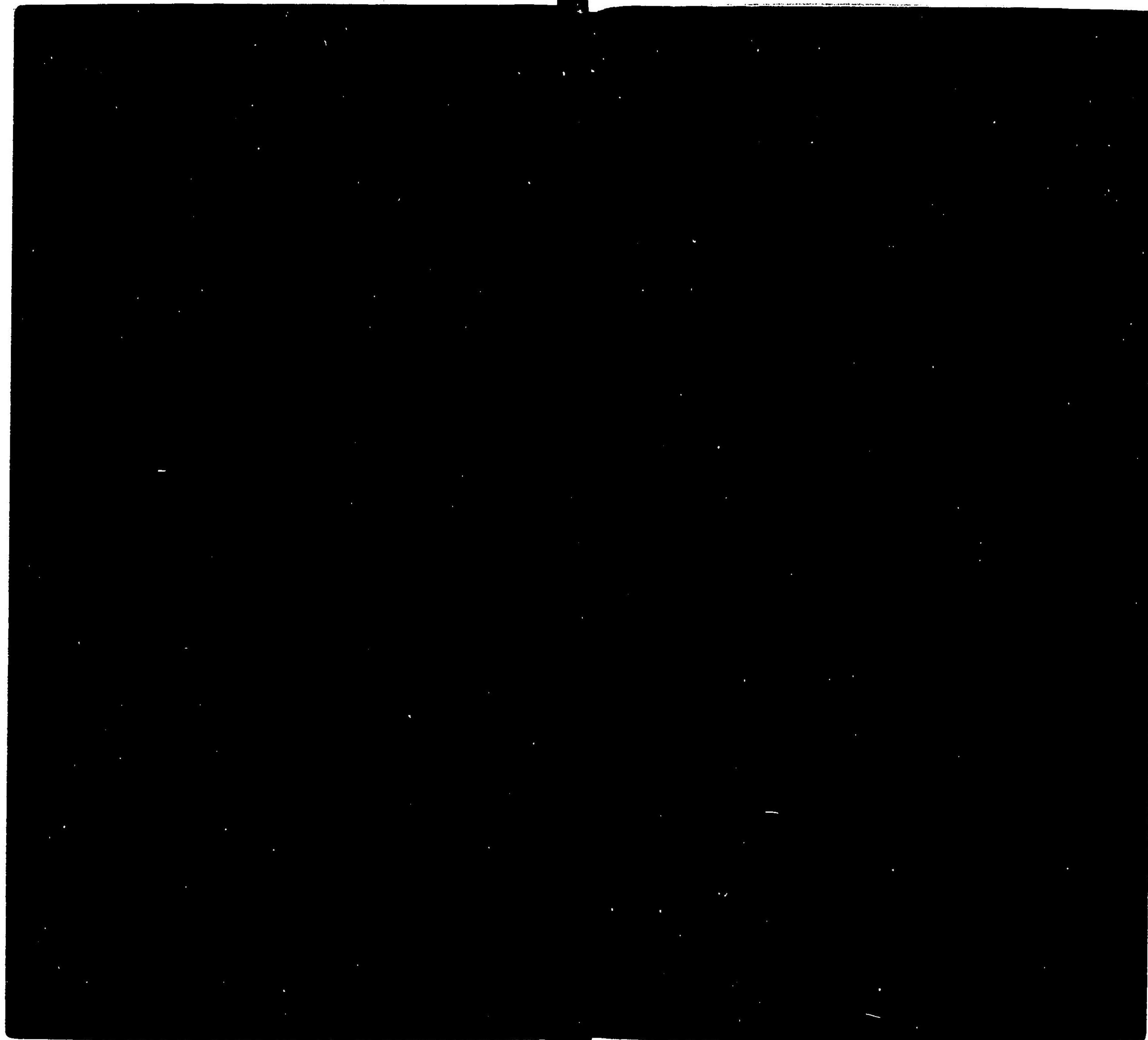
蓮 睡



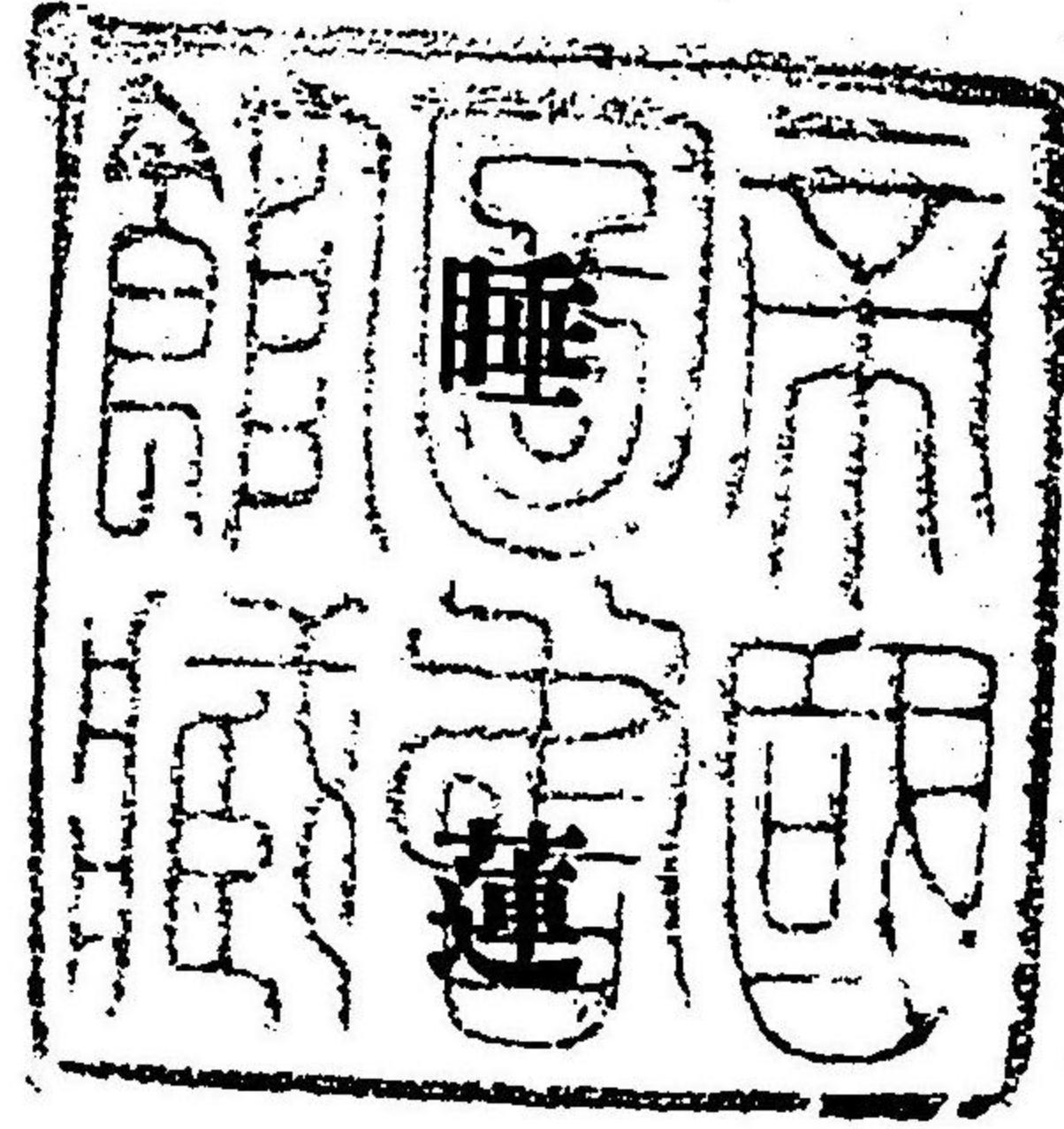
御
風
作



智



特22
454



相馬御風作



此集に收むるはかなうたの多くは皆て「白百合」外二
三の雑誌にのせしものなり。今さら世にさふ程のもの
にはあらねど、おもひて多きよひくくりかへし見る
に、さすがは身にうふ影のとりざりがたくおもはるる
ままにかくは恥を重ぬることとなりつ。

表紙畫并に挿畫はわが幼さをあはれみたまひてせめて
は門出の衣にもとて、和田齋伯の特にゑがきめぐまれ
しもの、又表紙なる「塵蓮」の二字は目白僧園にます風
戒師の筆になれり。ここにつつしみて深きみなさげを
謝す。

明治三十八年九月十八日

作者しるす

畫

天馬

睡蓮

天上春

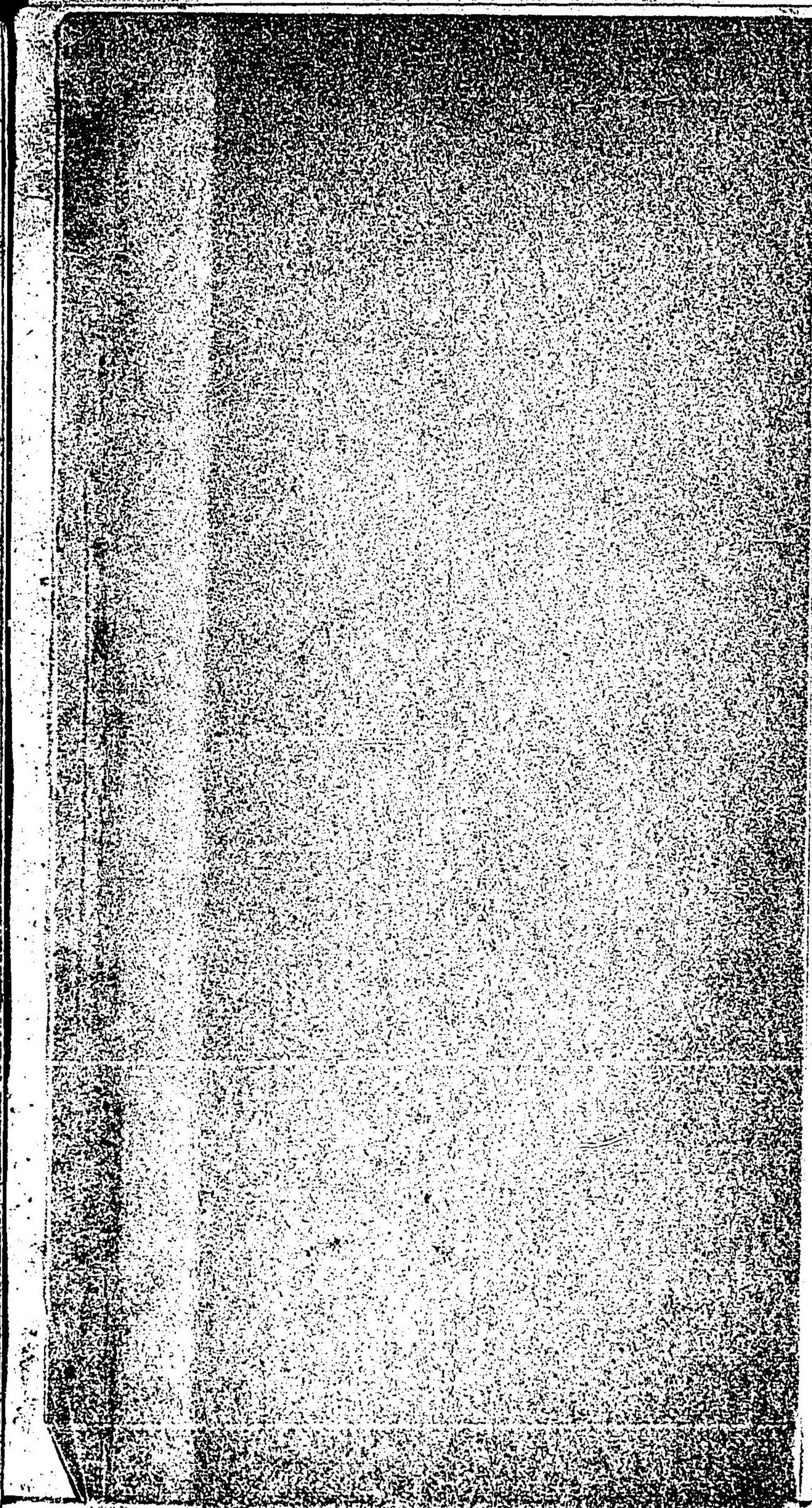
和田英作畫

=

花 守
藻 の 花
夢 つばめ
亂 れ 香
草 笛
天 上 の 春

詩

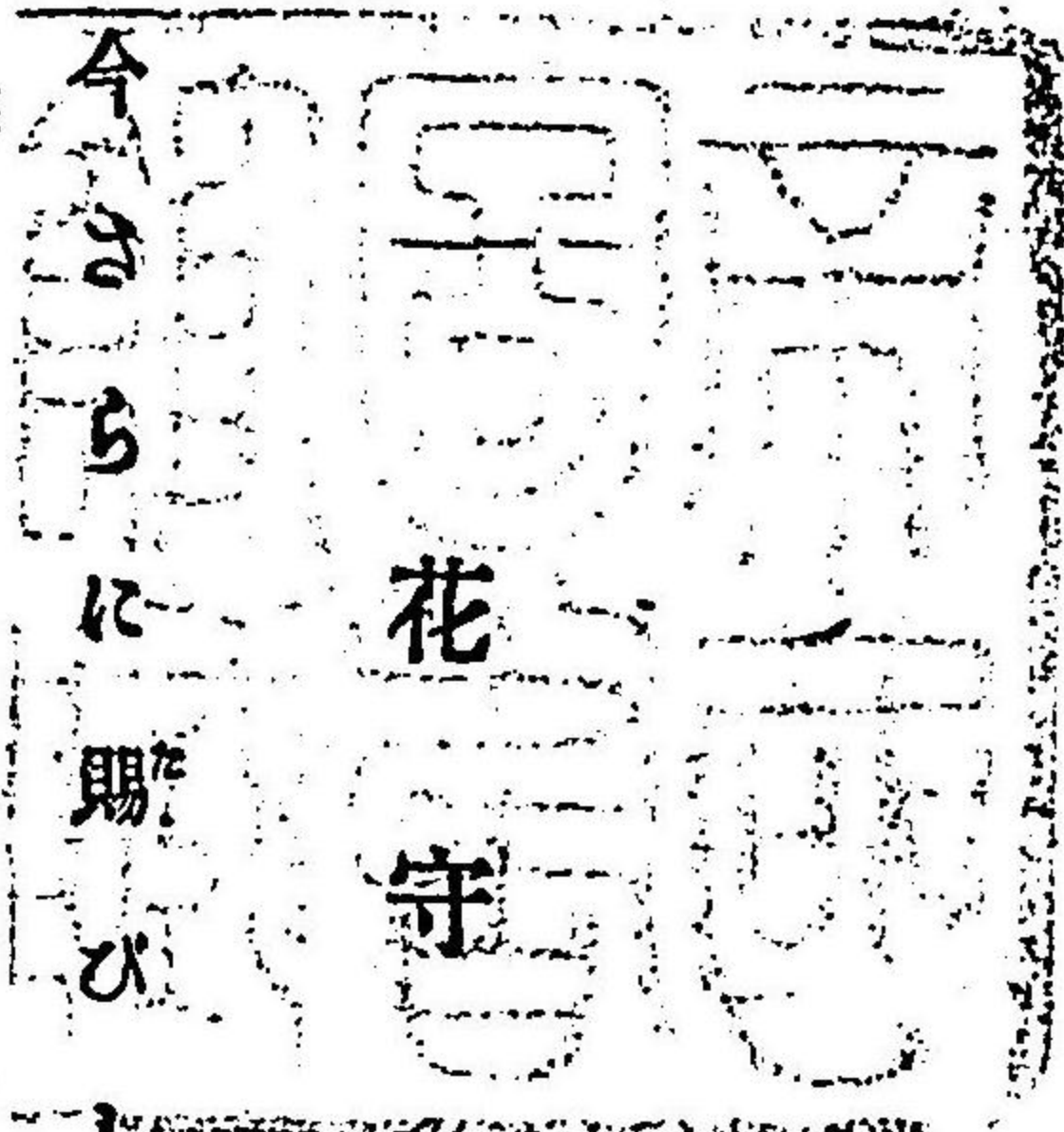
相馬御風作





睡蓮

相馬御風作



みだれては若き花守
今さらには賜ひし
廣野ぞうらまゐるる夢

見かへるに千年百年なほたらず相見
し宵の遠くもあるかな

神に似るはたと君戀ふるころのみ
信は二人の胸つつむ彩

花かけに思ひ見るだにうつくしきわ
が前の世ぞ星なりけらし

泣くひまに花はしほみぬ野は暮れぬ
さていかにして君を待つべき

おち入るも淵に玉藻の香はみたむ花
野の果をいづこと問ふな

死の淵にうつりし影のわかきにぞう
つくしきにぞまたかへり來し

心なく口にあてたる花びらに命おぼ
ゆる春のくれかか

天さしてなげつる花種の根はもたず
かへりてはまたさびし野の末

つみて來し花よ小草よ今にして愁か
ざるになれしわれかな

夕舟やへさきに垂るる友禪の袖にす
がりててる螢かな

このまゝに果なき旅のちもひする手
とりて入りし森かげのみち

君が家へたゞ一すじのみちなれど心
うかりさかのうしろ影

負籠おびかごに山百合やまゆりそへし菅笠かやがさの二つ暮れ
行く夏がすみかな

いつの世か縁とりまく幾千里いくせんりなかの
花野はなに相見あひまざりしか

いつと知らず夢にて見たる彩雲さいうんの君
おもふ眼まなこにまたもわき来る

したひよりていだく胸なき身ながら
も泣けばたのしき戀こひのふるさと

虹にじに似てうつくしきものわれをまさ
ただ何となう泣かす夜半かな

美うつくしき衣ころもまとはせて舟ふねにのせていづ
こともなく君きみやるととき

うつくしと人にかくれてほほゑみし
君が鏡をまづとむらはむ

うつくしき御袖といひてよりながら
涙ぬぐふになれしわれかな

さそはれて水に落ちぬる花の種花と
咲かむによるべなき身か

たれにとてすねるにあらずつれ
をちらして見たり木蓮の花

春雨の垣根にわかき愁入そのまま花
と化せばいかならむ

手枕の夢よりつづく夕もやのはてな
る彩に君を追ひしか



なか
かこるは黄に紫に

野に出でて君におしへし花の名を思
ひ出でては歌につゞる日

しらぬ里知らぬ野路を迷ふ子に兄と
よばれしわが涙かな

亂れ合ひゆく繪日傘に振袖に絲遊か
らむ桃日和かな

頬あかうて花にかくれし世すて人に
くからずやは戀のすね人

追はば地にまたも消ぬべき羅の袖す
かし見るおぼる夜の月

垣根ぞひかへり見がちに行く人に木
蓮ちらしふる小雨かな

君が行く里はまだ見ぬ里なればただ
に縁のかげとし戀はむ

泣く君を中にとりまく花あやめ里な
れまさぬ夜をこそおもへ

手をわかちつとはなれたる二歩の間
をあわただしくもとぶつばくらめ

あやめ咲く門田の畔にぬれながら田
植唄さくつばめやわれや

相集りて夢語らふによき朝や縁にと
ぎす温泉の宿の雨

ながれよる白き藻の花ものはなに美
き名つけてはまた流しやる
わが思四屋の間に薫吹く春の風とも
君によらまし
紫にくれ行く春の信濃路や小笠小笠
に鶴ゆれかゝる

うぐひすに餌をやりおへて見のこし
し夢追ふ窓に春雨ぞふる
花どろも二人かつぎて舞うてだに亡
母招じたき野の彩霞
ちる花はみなわが胸によるごとく情
こちたき春のくれかな

心なくちりし小瓶の一花もいだかま
ほしき夕べとなりぬ

いくたびか弱き思の子にそひて涙も
見きや戸のくね柳

冥府の戸か神の御園かしらずただい
だきて墮ちし國うつくしむ

渴きてはこがれよりぬる旅人の泉に
だにも毒ながす世か

れつる星きゆる雲にもわが靈を戀ふ
ものありて泣くに似たる夜

いだかれて行くべき天使のれん面わ
想へどただに母のみ見えて

さす棹に誰が戀ねたむ唄ぞ夕べ面う
つくしき舟人や春

藻の花

大海のひろきがなかに藻の二ひらか
らみて咲くと見ば足らむ戀
はてもなき涙なれども電のひらめく
ままにつとはなれたる

さびしきは君にならひし幼な心縁の
衣の身にそはぬ夏

そは夢のふるきにまがふおもひての
里は緑のかげくらくして

夏川やわたるにからむ藻の花のひか
るるままに沈まむ二人

昨日かも別れしみちの戀しくて行く
行く暮るるねぶの下かけ

御手とりてわたらせまつる反橋の下
をくぐりてとびぬ翡翠

電は二人をさきて野をさきて今宵も
君が戸にまた消ぬぬ

雲なき日夏の緑の十重二十重なかに
うもれて死なばや足らむ

夕ばえや軒に来てなくひぐらしの羽
かがやきてねぶ花ちりて

夜の潮や流るる星や沖の灯の帆影に
人を戀ふ子もあらむ

おもだかの池見て立てる夕庭を蝙蝠
君が肩よりわれに

そよ風やねざめすゞしき朝姿蓮さる
君と香たくわれと

泣きあきて森かげ出てしさまよひの
二人をさへもうらやむ世なり

來し方よたとへば細き彩雲のはてな
き闇に星をぬふごと

彩鳥の翼まかるもひしてとどろ
入りぬる戀のふる夢

君をまくに小百合白百合うまし歌戀
ならなくも地はあたたかや

戀してはわれも神人の額に百合花
かざす興も得てがな

夢かあらずただあかつきの緑野に影
追ふごときわがおもひかな

ただひとり野にのこされてなつかし
といださし花になど悔あらむ

壁書には見ぬ世の人の戀そめてとこ
しへ酔はむ面影の宮

むしろわれ君がやさ手に毒うけて死
なば足るべきこの夜頃かな

夕やみを香の烟にうたれては盞みだ
るる墓もるわれに

星二の遠き荒野と荒野とに墮ちて戀
ふるに似し二人かな

かへり見て二人生れし野をおもひ迷
うて來つるわれをかなしむ

山やどり爺が斧とぐ枯うたのとざれ
ざれをなくほととぎす

市いちにして岩いわに耳みみあて遠とほき音ねの世よの潮しほ
わぶる流なが人ひとを見みたり
何なにをかもゆめみみがほなる御み佛ほとけの瓔えい珞らく
ゆりてふく青あおあらし
夏なつ花はなにうもるるごとき野のの墓はかに袖そでか
けながら朝あさの雲くも見る

めてられて市いちにあごりし昨きのう日ひをも土つち
にかへるをなかじ破やぶれ嬰あや
醉よめひてさめて戀こひの盃さかくだく日ひをまた
むと神かみのたわぶれまさは
われとわがなげし真まこと珠たまの果は追おひて迷まよ
ふ世よ予よとも疑うたがひそめぬ

手さぐりにかぼそき糸もたのみつる
詩の宮遠き胸の迷路

わが筥人にとらせてうたせてを笑ま
むはむしろやすき今なり

かへり來ぬ羊たづねて野のくれにわ
がふく笛の音にまた泣きぬ

重ねても面に足らはぬみじか袖たま
たま人の怨みおひぬる

おそろしきものに追はれて來しごと
も故郷小野に世をかへり見る

うつくしき花のこぼれをひらひつつ
「時」の木蔭を來し二人なり

たどるこれ聖なる影のときめきや世
のさいなみに面はやせぬれ

かよわきも神のゆるせし花の力開く
に散るにたが手からめや

わがわざを昨日かわれとうたがひし
なるれば石もあたたかさ世か



來ますたびかざしませよのねがひの
み日ぐるま植ゑしわがかさね路

青淵に二人手をとる藻の花のかほそ
きをひく今のおもひや

藻の花や夕雲うかぶ湖の岸行くふね
の櫓にほのじろさ

うつくしき人を千里のはてに立たせ
笛して来よとよぶにも似たる

ことさらに放ちやりては雛鳩の翼に
淡き夕日影みる

しばしだに「時」の車の輪をととめふり
かへり見む神としもがな

花ごろも舞ふ袖いかにかろくとも野
に鶯の夢さまさざれ

あこがれの一夜ふた夜の手枕を人に
わけたき孤獨の身かな

うかりける思をまたもくりかへし人
泣かせたき宵にもあるかな

光ひかりとは仰あやがむものか身みにあびてほこ
らむものか地ちなるひとり子

かへり見てわが立つ野邊のへを疑うたがひつま
づ垂たれそめしわがうなじなり

うしなひし靈たまはおもはずすてつべき
むくろ何なにしかわれにかなしき

おのづから病やまみてもだへて得えし光ひかりい
つより歌うたの名なはそはりけむ

啼なく鳥とりになくよしきける賢とく人にわれ
らの歌うたは秘ひめしめたまへ

めざめしは無む絃げんの琴ことのろら音ねのみこ
の子こふたたび何なに枕まくらせむ

かばかりの世にほこらむぞまどひな
る君よしばらく眼とぢませ
力なうもたるる岩や藻の花のながれ
よりつつ今日も日くれぬ
蚊帳越しに香の烟のみだれ香や水ぬ雞ひ
に明けし雨のみじか夜

うすものの裳裾を袖をこぼれては蝿
みだるるおもだかの池
ゑませてははた泣かせてはかさ抱かき
たはぶれまさむ神の御意いとか
すがる手をほどかむほどの御力ちからにな
どかこの子が額かぶわらぬ神

地におちて青葉のかげにはぐくまれ
いつとは知らずちさき夢えし
かくてただあこがれ行かば野の末に
美しき子に遇はむとぞおもふ
すてられてあるは迷ひて來し靈の花
野にかへる彩がすみかな

うつくしきほほゑみめてて相よりし
君が頬に見む涙なりしか(なやめる友に)

その瞳ひとみその胸もちて鳩と生れ鳩と死
にしぞただうらみなる(以下三首友抱影が家の鳩の死にけるに)

天の園花のしとねの夢路にも地なる
情なさけの友かへり見よ

はかなしとちさきながらに観^{くわん}じきや
さびしかりけるなが腫^{ひま}かな
まるらする香^かの烟のみだれにも心お
かるこの夜ごろかな
眼^めをとづれど虹に似るもの亂れあひ
て追ふにくるしき君がおもかけ

夕ばえの野を行く人と森づたひかけ
行く人とよびかはすごと
黒髪のみだれ頬をうつねもひして花
ちる中をあのきて來し
幾千の博士學者がむづかしう「人生」と
云ふものかわれのこしかた

夢つばめ

信濃より今日も若葉の嶺越えて母な
き軒をなくほととぎす
あやまちて遠き來む世を今にして生
れし二人の罪にかあるらむ

さなきだにすつべかりける歌卷の炎
となりて胸まぐ夜半や

ほととぎす明くれば郷へ入る旅の夢
のまにまに人戀ふ夜かな

幼うて去年を昨日を見かへるによき
かくれ家よふるさとの軒

ある夜ふと瑠璃の御殿にさぶらひて
何とはなしにねぼえにし歌

うたがはば珠のかひなも罪と見む戀
はうつろの胸にもゆる火

詩や戀や「時」の梭手に織られては天地
つつむ錦あや衣

ふと立ちてよぶ人なきに來しごとく
三年ねぼろの戀のおもひて

いつとなうよるになれにし古びさし
忘れてはまた人の待たるる

この二人花とも咲かず火とも化らず
戀ふるぞふかきえにしとおぼせ

ある時は百合ともめてし御小胸の底
のうれひに今日泣かむとは
つたなくも歌よむまでになりぬとぞ
御墓はらひてつげまゐらせむ(亡き母の御墓に)
母の柩かつぐに足らぬ手力を泣きし
ぞよわきはじめなりしか

「今宵」をば永久の旅路の一夜とも終の
ねむりの臥床とも見る
何となく人なつかしき夕べやとむな
しう閉ぢて戸に歌をめぬ
れもはずも涙れとしてつみし野の小
草に花のなきをうらまぬ

慕ひよりて追はるるものか罪^{つと}負ひて
墮ち行くものかかの流れ星
唧^{せむし}へてはいづちへいぬる夢の鳥その
靈^{たま}むしろかへさずもあれ
相いだく二人は知らずその宵よ翅^{はね}あ
る神のねたう見けらし

紫の御^み袈^け裟^さにふさふ秋のもやゆくて
野菊の路^{みち}ほのじろく

鈴虫が露の戸に立ち松虫の音^ねに鳴く
ごときわが涙かな
いかなればつめたき石に名はきざむ
さかしらなれや人のたはぶれ

あやしげに啞の子われの笛うばひ口
にあてては母泣かしつる

ぬかづくに神の名しらぬかたくな子

「自然」はやさし今日も容れつる

ここよりは君が領ぞと祝はれてなほ
入りかぬるわれにもあるか

小雀も百合に集りては靈と見ゆ戀は
花はむ虫なりけらし

うたうてはみづから恥ぢず世に怖ぢ
ずおぼろげながら尊とかりにし

一片の花にもちさき夢ありと博士せ
めてはうたがひたまへ

うつけては「時」の女神の歌聲にあざむ
かれつつ來し世とも見る
仰ぎては語るに今ぞなれつるよ御空
の友はわれいつはらぬ
野の星に身を忘れての夕ゆいのりかく
てはつべき我が世ともがな

こざかしきのろひもなにか詩しの神の
御手てさぐる子よ世にねろかなれ
病みて泣きてねもはず合すたごころもく掌てのひら黙し示し無む
限かのそれか秋の聲
問えあらばもだえのままに行かしめ
よ終つひの吐息いきそただに尊たうとき

寺やどりまろねの椽えんに紙燭しじゆくして虫よ
びながら瀧たにさく夜よかな

萩の戸に風する夜よなり沈え焚たききて静しずか
に靈たまの行ゆ方かたさだめむ

水の音に穂ほすすきゆらぐ一つ家の軒のき
にしのびて虫むしさく夜よかな

ござかしきうごめきのせてめぐる地ち
を星ほしいくとせか笑わらみて見みまもる

ちちて凝こりて涙なみだよ白しろき百合はくげと咲さけや
すき眠ねむの園のぞなが領りやう

夢追ゆめおひてはる　　来きつる帝ていの領りやうあな
さてまたもかへれとや君きみ

弱からば弱きがままに神にゆけみち
に泣く子を誰かへり見む

靈ちりく出てはちさきもぬけが
らあざけりつつもかへりてぞぬる
何と知らず得たるを聞にうつくしむ
かくて此子が信なりや神

詩は人をよみがへらす靈の泉神と
よばんもはばかるな君

放ちてはれどらしむるに舞はしむる
にかの空高し靈をとざさぬ

あめつちにかかれる琴の音にふれて
細うもあはば足らむわが笛

詩と云はじれどもひと云はじ此ぬかに
れのづからなるこの光なり
ちさき子がもだえのあとと見ば足ら
む誰がれもひてやわが詩わがうた
ためらはず胸の小琴の音につれて歌
はばやすきわが世なるらし

ああ、炎、何をうらみの乳母が家幼きわ
れの夢もこもるに (以下五首故郷なる町の焼けたる時)
魔火なれば切風なればぜひもなしせ
めてと庭の花つみてにぐ
家一つなに惜まひやかへり見ておも
ひてなくばわれも泣かじを

金^か 絲^す 雀^{すずめ} の籠^{かご} 背負^{せお} はせてやりし子があ
とをな追ひそ炎よ風よ

か の星ありかの波あればなほ足れり
焼^や 樹^き に倚^よ りて夢やたどらむ

亂れ香

野を越えて鐘の音低う北に迷ふああ
今かなた誰が妻か死ぬ

戀に泣く人の頬をふきわれを吹き秋
風母の墓へと吹きぬ

君が戸にも同じう泣かむきりぎりす
よびてたがひのうたれしへばや
さびしくば夜ごと枕にわが名よべよ
びつつわれも袖まきてねむ
秋なれば夢は幼きうれひのみすねむ
に母のなきをうらみぬ

くろがねの管しほとに泣きし昨日だにわが
世と見ればまたなつかしき
やせてわびて罪ぞとなげし小鏡かきかみのく
だけしながら秋の日くれぬ
うらがれてはてはさびしう江に朽ち
む葦あしなになれば笛にふさへる

迷ふ子の袂ひきてはためらひぬさひ
しわが里たれにふさはむ
わが胸にしみぬる背のやさ夢もわか
たまほしきなだまきの花
すがるべき一人の母もまたぬ子に郷
はつめたき墓とし泣かる

さざみ行く「時」のひびきかたえだえに
わが胸せむる壁のこほろぎ
ともすれば男にも似ぬ涙ゆえ葬りか
ねし夢のなきがら
とる御手もあるはつめたきたむけともあ
のきたりし夜ありとおほせ

かなしくば二人相去る幾百里知らて
生れし日をおもひませ

秋の夜を清きうれひの少女子が涙に
ささし花か白菊

乃とりて死なんと云ひしろの手と手
いまうつくしうとるよ神前に

おもはずも二人來し野のかへり見や
涙にあけし花のあけぼの

さきりくすはじめてささし夜の枕雨
の音して朝さめにけり

かのひと時靈は去なせし二人なりむ
くろのわかれ今うつくしき

あるじなき戸をおとなひて立つおも
ひ聖壇まぢかに手は合せども
彫られしは遠き御園の戀の扉の消え
ず消されぬ名とれもひませ
召されては御神にまゐるうたの子が
うたうて行かばたらむ短か旅

花に見よ色いつはらぬ野のおごり幾
とせ人のかくれがちなる
さびしくも神の御名もてたたへむに
秋花などて世にたらはざる
ちさき身にも眼ひらきて才たびし人
よ御神の寵あやまるな

道に泣くや戀ひて死んやいづれきよ
き裁判は神予人よ手入れな
罪負ひて荒野を一人まよふ身かそれ
かとはかり世をせばめ見る
そむきてはいにてはまたもかへり見
る怖き御神の御手のひと花

大いなる御手のまな子よ幸の子よ春
のねたみをもれて來し蝶

まよひ來てなづる枯野の一つ石石な
になれば神にかへらぬ
仰ぐ星ふむ地いづれ泣くによきわれ
と眼のしひたりな今

得なむものか得させむものかああ光
人泣かせても人死なせても
またしても闇より闇にかへされぬ光
よちさき夢にはあらぬか
わが幸は花野にすがる神ならず沙漠
の泉汲まほつきぬべし

あめつちに一人のわれとめざめては
一人のわれとよみがへりぬる
打ちもせじ打たれもせぬにさばきと
てわれからちさき坑ほに入りますな(人)に
されうたに巖いうちてもあるべきにと
すればせまきわが世と泣かる

歌はつひにわれとさびしう泣かむ具
よふたたび神の御名は汚さじ

詩に酔ひてはたまたま人を失ひき歸
るに里の名も忘れにき

あやまたず射つるいさをも咀ふ世に
弓絃たびにし神うらめしき

戀ふ身には一夜波なき胸ほしき昨日
を明日をれもひ見るべく

めざめては胸なづるさへものうきを
なにとて夢の忘れがちなる

今更にかみてすつべき「生」の實かにが
きをしひてよる胸のなき

野の神のたはれと見むもうれたしや
秋を得て來しわが詩の翹
闇ぬうてはかなう消えしうす光ふた
たび胸によびもどすこと
罪の子が死の洞ふかう迷ひ泣く宵に
もあるか秋のさびしら

いだかれて眠りはしつれ夢の手にま
かせはつべきわが靈ならぬ
いつしかも天白百合のかけにしる露
としむべきわが情かな
ことさらに弱き子泣かせ夕御酒の魔
の興にとてふくか秋風

うれひのせて深洞にはこぶ羽車か秋
風戀の二人はさげよ

波の音にふとよき國のしのばれて打
ちし石にも涙おぼゆる

疑ひてわれから怖ぢし弱き子がはて
にも似たり亂れ紅芥子

他人の世をともに泣きにし昨日さへ
二人に惜しき涙なりしか

開くとて光に死ぬる愚はまねじ神秘
さながらいだきてゑまひ

おごそかや光あふるゝものからにわ
が手うたがひたぶをいなみし

「時」ありてわれらが世をもかぎりつる
死の手からずば開かれぬ戸か
こそかしらわが歌そめむ鳥とふか仰
げよき料秋の夜の空
消されては地なるわが名に泣きもす
れ神うらみむに悔はなき子ぞ

いたづらに筆かむ子らに詩は問ふな
天さす指を人にもとむな
いくとせをみづから死なず額わらず
御歌ずしてはよみがへり来し(詩の友に)
かさしは百合世にあるほどの詩人に
うたはれぬべき戀もせましや

舞ふべくば藤の瓔珞ぎんろく桃の衣きぬ二人が戀
に野を彩どらむ

追ひ來しはまぼろしの美うつくよ夢の美うつくよ
戀なき人を影と見る今日
ただにまけ戀の彩糸神の手にさしげ
ば足らむ『時』の小车

まかれては珠のかひなぞ神らしき戀
は光の國に入る門かど

秋あき花はなのちささがかけにはぢらひては
ゆしと見たる世にもありしか
にくからぬ男とだにもよばれなば秋
にはやらぬ涙なりしを

はなちてはまたなつかしし彩鳥の翼
にゆるる秋の夕もや

れごりならじ天なる星の戀妻とふみ

し人だにうらみ得ぬ身の(野菊のうたへる)

天の戸に戀としもなきあこがれのほ
まれにたびしわが歌の筆

召されては百合の宮居にまゐる子に
衣させわぶる母もある世か

ことさらに詩の花園みださじと二人
にゆりしみちか彩虹

さかしらや花にそむきて法は説け花
にもるべき法はなき世か

かざす手に光はそひぬつまれたる花
にもわかき血ぞめぐりぬる

百合ばなにつつむと見てし夢の手を
いつのがれても来しやわが靈

悲しとてわれと断ち得ぬ琴の緒のか
ぼそきだにも惜しきいのちや

のがれ来しわが身ながらに何となく
獄屋の闇のしたはるるかな

もろければぞくだけながらの榮あら
ひろの珠神の御膝になげよ

(以下二首心の
友なながしに)

ゆるしたまへたゝほほゑみてわかる
べき君と見たるぞあゝ昨日なる

草笛

泣く身にも夜毎の夢はうつくしさい
づれをわれの世とうたふべき
別れてはむしろ人なき森かげにさび
しき胸に君を戀はまし

病めばただ歌にあもひの足る身かな
合すにちさき掌ても二つあり(以下二首病床にて)
時ありて眠れる靈のさむるごと病み
てたまたまた尊おさ我わ見る
かへり見ればわれやあまりに弱かり
き弱きがゆえにたふとかりさや

青葉かけ同じゆめもるはらからが歌
に來て啼け山ほととぎす(以下四首北信の旅にてうたへる)

閑古鳥寂にあきたる山靈のたまたま
われをよぶにも似たる

かへり見て戀ふる人だにあらなくに
越えぬる山のただなつかしき

かたむけし小笠に情はこもらねど千
曲川原のただなつかしう

馬の背に遠雲見やるみどり野や馬子
は唄はて物思ふ間を

夕もやは行く子行く子のあとをこめ
春を送るによきすがたかな

夕潮やゆく帆かへる帆紫のうすもや
かけを天華あまなちるごと
眼めをとづればものみな白き雲にとけ
てわが身さながら空かけるごと
母とよびて乳房にめざめおん送はりかく
て一人を世に失ひき

灯あかりによりて追はるゝ蛾のごとも光の
かけに怖おそき手を見し
やがて地ちの下にくむべき君が手やわ
が手と知れどとればうれしき
泣きにとて來し身ながらに花かけを
歌のねもひに泣かてかへりぬ

春雨は物思ふ子と鶯と歌よむ人をぬ
らすに予よき

春雨の庭うつ音と夢の樂とつらなる
きはに君は來にけり

名も知らぬ里を慕うて迷ひ來しみち
にしあれど風こころよき

めさむれば花は額ひたかに胸に手に誰がい
たづらぞ釣床の夢

わがうたをせめて夕戸ゆきに誦なす子得ば
このうき秋を手とりて消えむ
さきりくすみゆびたゆたふ琴の緒の
ほそきにすがり泣くと夢みぬ

君ありてぞわが靈天の座を得しをほ
こらしげなる人よ教よ

明日はまた夕戸に歌のうかる身のな
ずや春風われゑはしむる

うつくしき大蛇したしむ子はねるか
あろかなる子やまた戀にぬる

かへり来てわれと老いぬる浦島の爺
にくからぬこの夕べかな

細う落ちて細うながるるわか草の露
なり人のほそき朝夕

孔雀羽の左には君右にわれいだかれ
て見し夢や戀なる

かざさむに胸に日ぐるま額かぶに百合戀
讀よずべく夏なつどよき國

とかくしてあるにあられぬみどりか
げわれよぶ聲の右に左に

靈たま今し若葉につづく幾いく山河かみ蛙かき雨よぶ
君すむ里へ

おん夢に何のさまして入りぬるや夜
なく君にやるわが夢の

一年ひととせの夢とむらはむ古ふる塚つかやゑみて彫ほ
るべきたもひでのなき(以下三首一とせのくれ日
記のおほりにしるせる)

何となきこの一とせのうさおもひう
ぐひすよびてはませむもよし

百八の一つの鐘の音におもひて
よせて年おくりやる

美しき珠つなぎ行く心地して一とせ

ひとに夢多きかな(以下三首年はじめに)

行く年の車につみしふる夢のこぼれ
てさらに新たなる春

今日よりはいかにひらかむ繪巻物時
の書匠またあらたなり

さばかりのもたえと花に笑はれて泣

きて泉ににげ入りしゆめ

春今しただかひいだき戀いだだきわ

が歌聲に舞ひも來しかな

彩雲かあるは御神のおん裾かおろが
むぬかにまばゆかりにし

ただ一人光あふるる野に出てて行方

忘れしわれにもあるか

なにとしらず尊き御手にいだかれて

ただある身ぞと思ふ夜もあり

すてていにし主はしらねど夕まよひ

野にえし笛のふくにえ堪へぬ

夢の野にいつしか得たる草小笛ふき

つつ来しに身はやせにけり

美の神のおん額かざる二つ星地にし

ておなじゆめのはらから
(以下二首折にふ
れて友抱影にふ)

さばかりにもだえはあなじ地ちにあり
て君と二人は美よき日にあひぬ
夢ぬけてと見る百合の香彩霞あざな舞まひ來
しむれに君をえらびぬ
夕窓に鸚鵡かきすゑては人待つとやさし
男をとこを都に得つる

さびしさをしたしむまでの身となり
ぬかかるを人の老おきなとや云ふらむ
天あまの戸に二人のうたはしるさむと弟
さそふわが兄もがな
まよひ來し山吹がさねもやの朝夢さ
ながらの人を戸に見る

垣ごしに夕雨あかさ落椿襖おもたげ
の子や西の京

みだれてはたびし御うたうらめし
きああまた今宵笛はわれたり
うつくしとめててやみなむ花ならば
つまじつまざれこのこむらさき

いかなれば弱うもれつる涙なる御神
に寵の君としおもへど(以下二首友の死に)

きよき手にきよきおもひの君いだき
神はこの世のうたきさまさむ

など夢にいまはによびしわれの名のほそき聲だ
にしみはこざりし(以下母なきわれの母ともたのみし乳母の死に)

この春はかならず来よのつて言は墓
に泣けよのまねきなりしか
ひくき軒やほそき灯やひろき爐や通
夜の一人にわれもとむらむ
とむらひのむれは泣く子の手をもひ
きて今し雪つむ門邊出づらむ

都にもよき友ありと一人子をきづか
ひまさば母につけてよ
天の座に母とあひ見ばたけのびてう
たさへよむとゑみてかたりね
罪なりとも天に入る罪のかへり見に
せめてはわれの夢にうつりね

郷人よせめて墓石の面だにわが泣く
方にむけてすゑませ

天に行くなれとあもへど何となくつ
めたき闇にやるこちして

いとせめてこの身この胸なが乳のか
たみとだにもめてて世を経む

天上の春

二人地になつかしみてしむらさきの
星よこれなる座にぞありける

天にしてあこがれつきずわがなやみ
神の御手にも涙おぼゆる

あなたふと、わが舞ふ袖の光にもあこ
がれあふぐ地の幾千人

わが室の鍵はたびつれさびしらや君
待つひまを花つみてねむ

歌はみな珠扉に彫りて地のおもひて
泣きし昨日のおもかけとせむ

昨日まで泣きしわれともおもほえず
舞ふ袖かるさあめの庭かな

ああさらに想は遠き八千歳の神か
し身の幸れもほゆる

ここにして地の春見ればまたな
し東の間だにも涙はほしき

東の間の夢とおもへどしかすがにす
てもかねつる地のねもひてや
人ならば衣もまとはめここにして乳
房はたれにはぢて蔽ふべき
君がぬかにこれぞふさはむ常世百合
花環つくりてまちならばや

いつの時か二人の歌をそめて見しそ
の花神の御手に見むとは
舞の庭百合環かざせる女の神のなか
に見るべき君をまつかな
罪おひて地におち行く星にだにこと
づてもせば君は來べきか

つれづれをつみておとしし一ひらの
花にのりつつまた靈たまの來る

しひられても舞はてやあらむ天あまの庭
金鼓かねつづみうつべき君來ざる間まは

今にしてねもへばさらにうつくしし
君ありてこそ神も戀ひしか

しるさむにわが名はづかし神の帖うりダ
ソテの御名みかも見出てつる今

いづかたに父やまします母やります
情なさけは天あまにすてよとか神

ぬぐはれてなほものたらぬ神の膝涙
はとはにすて得ぬ子なり

蛾のむれが天の灯したふあこがれと
わらふ世人になにつたへてむ

睡蓮畢

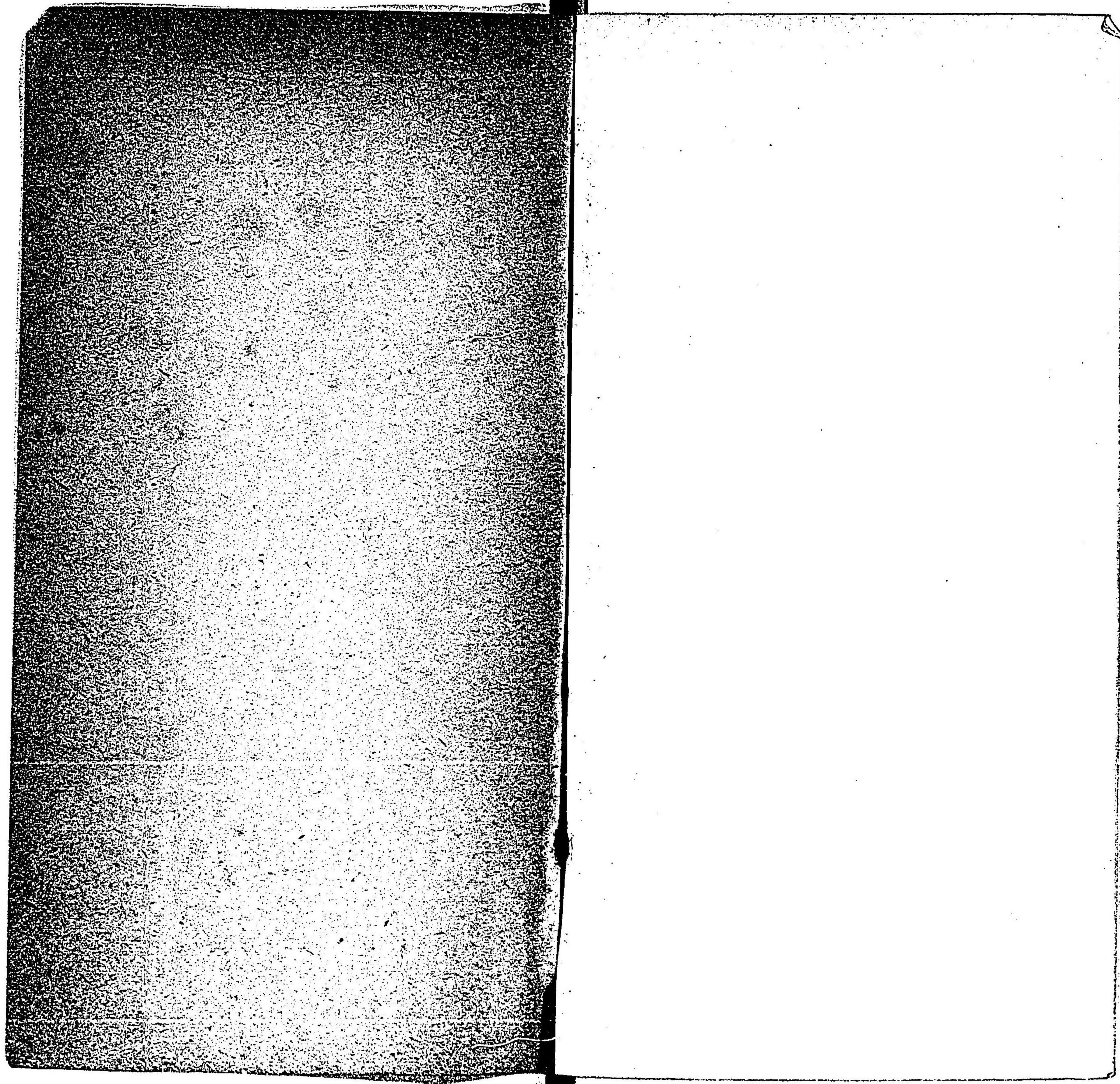
明治三十八年九月三十日印刷
明治三十八年十月十五日發行

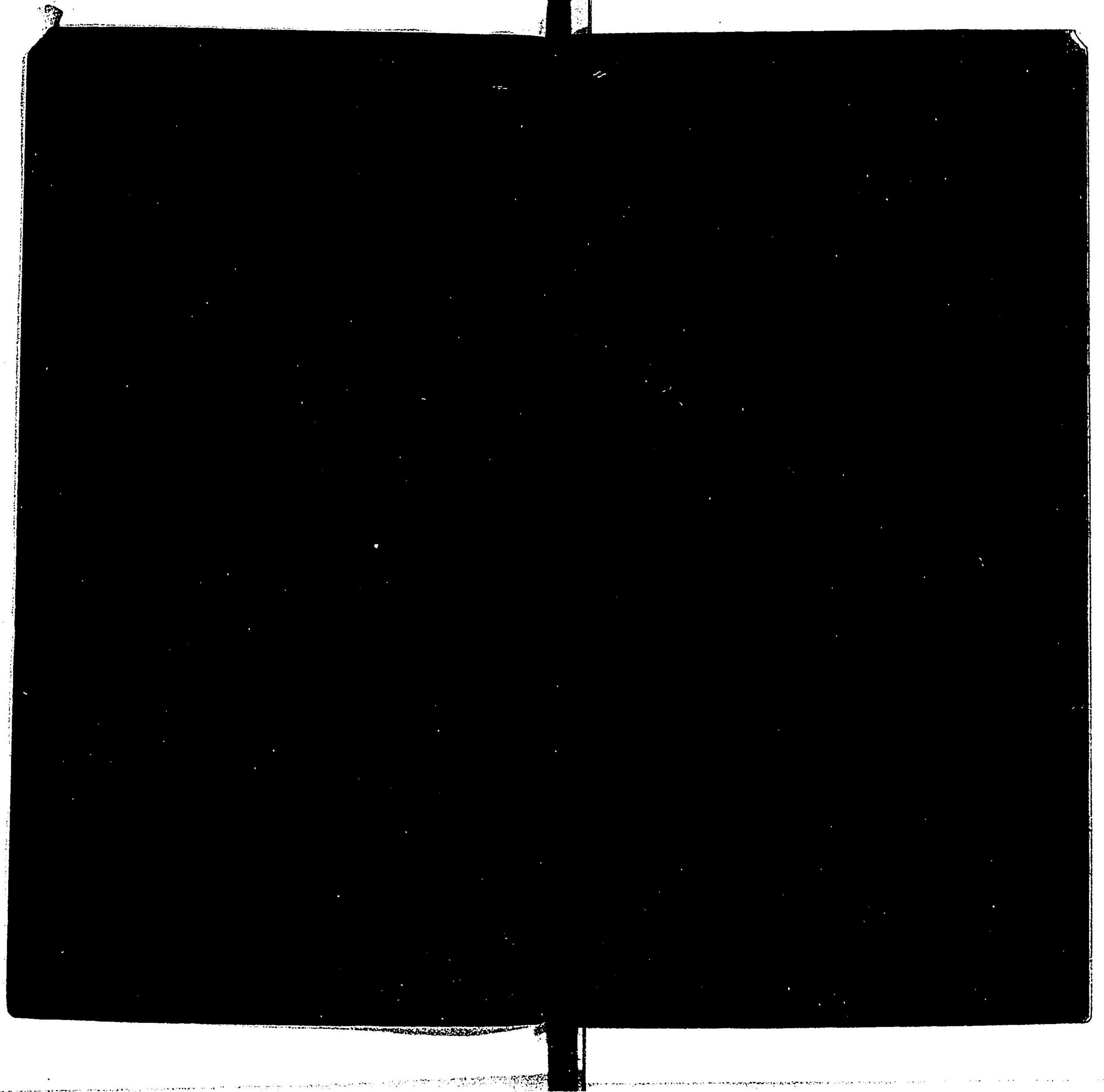
定價三十五錢

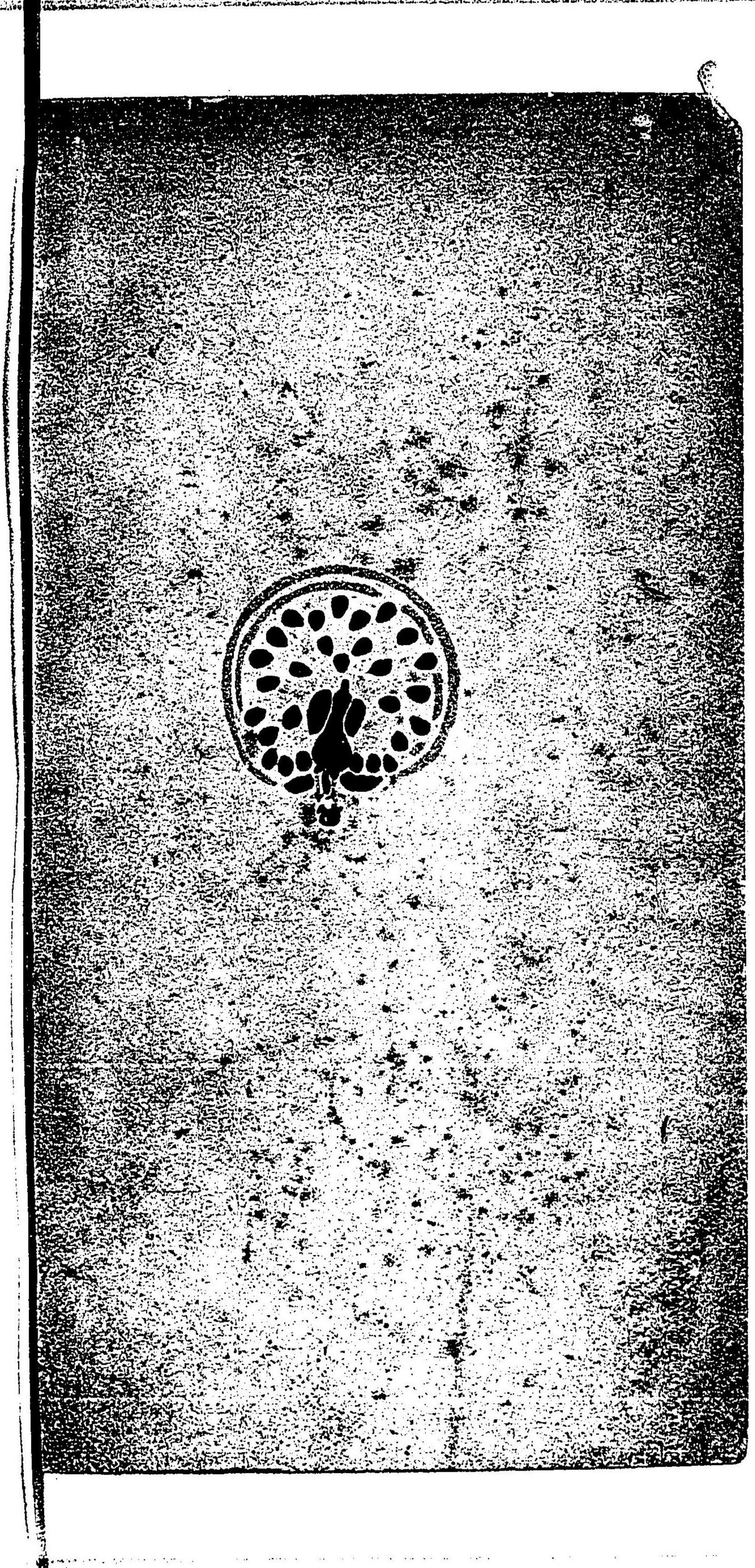


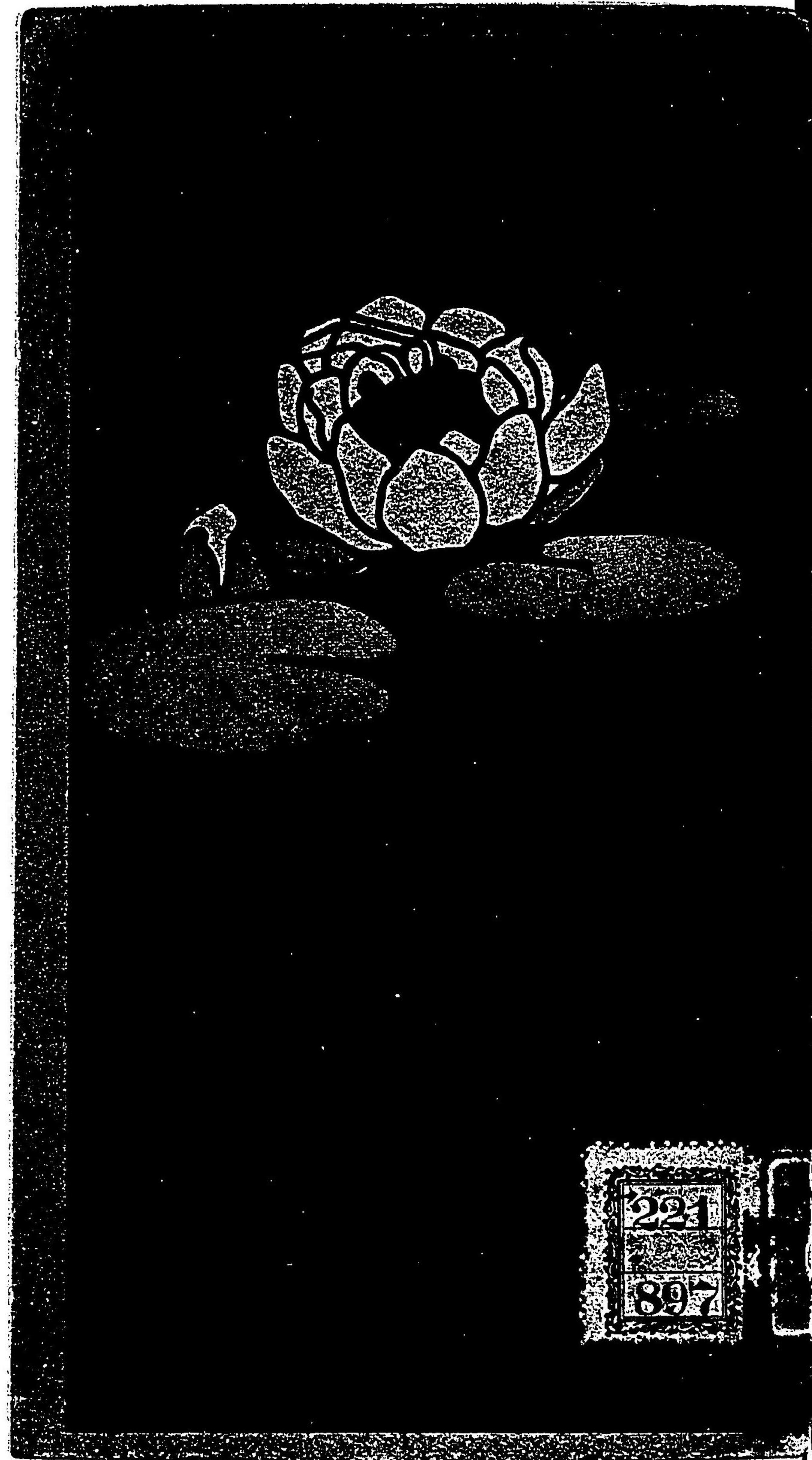
著者 相馬昌治
發行所 東京純文社
東京市目黒區三軒
有木素者 前田鏡作
町三丁目一丁目三
印刷者 白土寺力
代東京市目黒區
一丁目一丁目

大賣捌 東京堂 上田屋 北隆館 東海堂 服部書店









086168-000-7

特22-454

睡蓮

相馬 御風/著

M38

DBD-0899

